

# 平成29年度 自己評価表 【中間評価】

鳥取県立米子西高等学校

本校の学校方針	質の高い授業と親身な指導を通して、進路実現に必要な学力をつけるとともに、地域社会の多様なニーズに応え、郷土に貢献する「知、徳、体、志」のバランスのとれた人材を育成する。
指導重点目標	①自己実現を可能にする学力の向上 ②基本的な生活習慣と社会的規範意識の確立 ③安心且つ切磋琢磨できる人間関係の構築 ④保護者・地域と連携した活気ある学校づくり

重点目標	年 度 当 初						経過・達成状況	評価	改善方法
	評価項目	評価の具体的項目	現状	目標（年度末の目指す姿）	目標達成のための方策	経過・達成状況			
①自己実現を可能にする学力の向上	高い志の育成	○目的意識と学ぶ意欲の向上	○進路目標が明確でなく、学習に対する意欲に欠けている生徒がいる ○自らの可能性を低く評価してしまい、チャレンジする姿勢に欠ける傾向がある	○「みらいチャレンジ活動」を中心に学問に対する興味や意欲を高め、主体的に学ぶ姿勢が身につく	・「みらいチャレンジ活動」を充実させ、地域への公開も図る ・1年生・3年生の総合的な学習の時間の改善に向けて学年主任との連携を図る ・1年生での準備段階を充実させる。特に、話し合い活動を活発にするため、1年生でコミュニケーショントレーニングを取り入れる	・「みらいチャレンジ活動」は予定通りに進行している。地域への公開については、2月に予定している ・1年生での「総合的な学習の時間」の改善に向けて、アンケート調査を検討中である ・1年生のコミュニケーショントレーニングは2月に実施予定である	C	・2月に実施予定のものについては最終評価で評価し、改善点を検討する ・1年生でのアンケートを2月に実施し、来年度の改善に繋げる	
		○自ら課題を見つけその解決に向けて積極的に行動する態度の育成	○体験的な活動を重視し、目標達成に向けてチャレンジする態度・能力が育つ	・読書活動・体験活動を充実させるよう関係機関との連携を図る ・1・2年生でビブリオバトルを実施し、学年団・図書部と連携しながらコミュニケーション能力を育成する	・ビブリオバトルは今年度は1年生のみ1月に実施する予定であり、「みらいチャレンジ活動」に繋がる活動とする	C		・2年生は「みらいチャレンジ活動」のまとめの時期に重なるため、ビブリオバトルは1年生のみで実施し2年生に繋がるものとする	
質の高い授業の実践	○教員の授業力の向上を図り、生徒が主体的に参加する授業の創造	○生徒の授業への姿勢が受動的である ○授業での教師に対する評価、生徒の達成感が十分でない	○アンケートにおける生徒の達成感に関する肯定的な回答が70%以上、教師の指導力に関する肯定的な回答が80%以上になる ○全教員でアクティブラーニングに取り組む	・全教科、全教員でアクティブラーニングに取り組み、一層の授業力向上を目指す ・「みらいチャレンジ活動」と各教科でのアクティブラーニング型授業により、生徒の一層の能動的な授業態度を育成する ・iPadを中心としたICTの活用をさらに広げる	・講師派遣事業で計画した理科・国語・数学・英語の外部講師を迎えての示範授業および研究授業は他校からの参加もあり成功裏に終わった ・各教科が毎月に行う公開授業も計画通りに進行している	B	・授業を参観する教員がまだまだ少ないため、教科の枠を越えた取り組みと広く参観を呼びかける		
		○習熟度別クラス編成、習熟度別授業のより効果的な展開	○生徒の学力の分析を行い、分かる授業を展開している ○先進校視察を参考にして効果的な学力向上策を立てる	・学校課題に対応した先進校視察を通じて、本校に利用・導入できるものは積極的に取り入れていく ・生徒の習熟の度合いに合った授業・考査・評価を工夫する	・生徒の習熟の度合いに合うように、習熟度別クラス毎に授業で取り扱う内容を精選し、考査もそれに沿う形で作成・出題している ・教科内の連携を密にして、適正な評価ができていく	B	・2学期には先進校を視察し、本校教育の参考とする ・生徒の実態と到達目標を見据え、的確な教材の選定と考査の作成・出題を行なっていく		
学習習慣の確立	○高校での学習方法の理解と必要とされる家庭学習時間の確保	○予習・復習をしている生徒もいるが、効果的な学習方法がわからない生徒もいる ○全体として目標とする家庭学習時間に届いていない	○家庭学習時間調査で次の目標を達成する 平日： 1・2年生2時間以上、3年生3時間以上 休日： 1・2年生4時間以上、3年生5時間以上 ○オリエンテーションを通しての学習習慣の確立と学習方法を理解する	・課題の内容や量を精査しながら学力および学習意欲の一層の向上につながるよう取り組ませる ・進路講演会や個人面談等を通じて、日々の学習の大切さを生徒に理解させ、継続的に指導を行う ・生徒の能動的な学習につながるよう初期指導の充実および日常の継続的な指導を行う	・期限内に課題を提出できなかった生徒に対して、放課後の居残り指導により課題の提出を徹底している ・昨年度の後半から試験的に始めた課題に要する時間調査を引き続き実施し、課題の量的な部分の客観的判断を行っている教科もある ・各学年とも目標とする家庭学習時間に達しているのは、定期考査直前のみであり平常時の取り組みに課題を残している ・1年生の初期指導は、昨年度よりパワーポイントを利用して内容の充実を努めた	C	・引き続き、課題の質・量を精査し、学習習慣の定着と学習意欲の向上を図る ・1年生の初期指導については、年度当初の日程の改編に伴い、一層の充実とその後の継続的な指導に繋げていく		
		○休日や長期休業における学習の充実	○土曜学習会、長期休業中の講習の参加者が増加する	・夏季学習会では、事前に生徒に計画をきちんと立てさせ、より明確な意識をもって学習会に当たれるようにしていく ・部活動との両立の一助になるよう各部活動との連携を図る ・模試の復習においてデジタルサービスのより有効的な活用方法や指導方法について学力向上委員会等で検討する	・夏季学習会の参加者数は、260名で昨年度より4割増増加した。計画表も昨年より具体的なものが各自で作成でき、充実した学習につながった ・模試の復習はより効果を高めるため、デジタルサービス利用からノートに書かせる方法に変更した	B	・夏季学習会については、参加者からの評価も高く来年度も続けていく ・模試の復習については、今年度の効果を見ながら一層の改善点を探っていく		
国公立大学に合格できる力をつけた生徒の増加	○主体的に進路を選択できる能力の育成と戦略的な進路指導組織の確立	○目標とする国公立大学の現役合格者数にわずかに届かなかった ○入学時点での学力差が広がり、進路意識の多様化が進む傾向にある	○キャリア教育を通して自立的な進路設計とその実現ができる生徒が増加する ○進路指導部を中心とした進路指導組織の確立する	・3年生の進路講演会は予備校から講師を招いて実施する等内容を変更する ・10月と12月の進路調整会のあり方について3年学年団の意見を踏まえて、個人懇談や三者懇談で志望校決定の具体的な資料が提供できるようにする ・引き続き先進校視察、教員による大学訪問を実施し、進路指導に有効な情報の収集・蓄積を図り、生徒への指導に活かす	・3年生の進路講演会では、学校選び・模試の活用などについて具体的に説明してもらい、勉強中心の生活に切り替える良いきっかけになった ・生徒に適した大学を勧めることができるように情報を蓄積するため、今年度も国公立大学を4校訪問した	B	・予備校講師による3年生の進路講演会は来年度も継続する ・大学訪問については引き続き実施し、進路指導のノウハウの蓄積に努める		
		○模試結果の利用とセンサー試験を意識した指導	○1月進研模試で偏差値50以上の生徒数が1年生で160人以上、2年生で140以上になる ○国公立大学の現役合格者が60人以上となる	・1・2年生の予備登録・本登録の時期や3年生の総体後など、回数は少なくとも進路を考えるべき時期に「進路だより」を通じて必要な情報を発信し、意識を高めさせる ・模試等で数値目標を設定し、その実現に向けて委員会で行う ・模試分析を活用し、授業内容の改善と課題の工夫に繋げる	・「進路だより」は、9月初旬時点で各学年1回ずつ発行した ・7月の校外模試の偏差値50以上の人数は、1年125人、2年139人、3年71名(5教科型)であった	C	・今後も必要な時期に進路だよりを発行する ・模試の結果については満足できる数字ではなく、委員会等で対策を検討し実行していく。また、上位層が少ないので、難易度の高い問題の扱いについても検討していく		

評価基準 A：十分達成（100%） B：概ね達成（80%程度） C：変化の兆し（60%程度） D：まだ不十分（40%程度） E：目標・方策の見直し（30%以下）

重点目標	年 度 当 初						経過・達成状況	評価	改善方法
	評価項目	評価の具体的項目	現状	目標（年度末の目指す姿）	目標達成のための方策				
②基本的生 活習慣と社 会的規範意 識の確立	基本的生活 習慣の確立	○健全な心身の育成	○問題行動は若干あった が、生徒全体としては概ね 落ち着いた学校生活を送っ ている ○昨年度は一昨年度に比べ 遅刻する生徒が若干増加し た	○年間の問題行動発生件数が0になる	・2・3年生への働きかけを強化し、学年集会、終業式等で強く注意喚起する ・教室掲示用の「生徒部からの注意」を学期ごとに作成し、問題行動の発生防止に努める	・残念ながら3件の問題行動があり、指導を行った	C	・各学年団と連携し、学年集会などを通して指導する	
		○学方向上につながる生活リズムの確立		○年間遅刻者数が前年比10%減となる	・引き続き毎朝の昇降口指導を行い、遅刻者ができる限り減るよう務める ・精神的な問題を抱えている生徒については、生徒支援部との連携を行う	・遅刻者は、昨年と同様に毎月少ない数で推移している		B	・引き続き朝の立ち番指導を行う
	社会的規範意識の育成	○社会の一員としての自覚の喚起	○自転車の運転マナーはやや改善したが、苦情の通報がまだある ○TEASの活動については、ゴミの排出量、電力使用量、水道使用量とも現在のところ今年度の取り組み目標をほぼ達成できている	○地域からの信頼が向上する ○環境を意識した生活を送る	・自転車通学時の事故も発生しており、自転車通学者への指導を強化する ・街頭指導の回数を増やすとともに、安全運転教室等の開催も検討する ・TEASに関しては、今年度の目標を達成する努力を継続していくとともに、生徒の環境意識を高める取り組みをしていく	・数件の自転車事故が発生した。また、近隣からの自転車運転に対する苦情も数件寄せられた ・多くの生徒は徒歩・自転車での適切な通学を行っているが、一部に自転車での並進や右側通行を行う生徒が存在する ・TEASの数値目標は概ねクリアしている	B	・引き続き街頭指導等を通じて自転車運転の指導を行うとともに、自転車の安全運転を呼びかける掲示物を教室等に張り出す ・引き続き生徒会執行部を中心に、ゴミの削減や、電気および水道の使用量の削減を呼びかける	
③安心且つ 切磋琢磨で できる人間 関係の構築	健全な高校 生活の充実 できる人間 関係の構築	○部活と学習の両立ができる生徒の育成	○定期考査前の部活禁止期間も徹底できるようにはなってきた ○生徒会活動全般において、生徒会執行部が主体的に活動している	○部活動と学習の切り替えがきちんできている	・週1日の部活動休養日を設ける ・引き続き定期考査前の部室の鍵の受け渡しについては、活動申請を確認したうえで行うようにする	・各部とも週1日の部活動休養日が設けられ、体調不良を訴える生徒は減っている ・定期考査前の部活動禁止期間についても概ね守られている	A	・引き続き生徒・職員に健康面に留意しながら部活動が適切に行われるよう訴える	
		○部活動・生徒会活動の活性化		○部長や生徒会執行部を中心とした自主的な活動ができる	・生徒会執行部の生徒たちが、自分たちの仕事や年間の生徒会行事をスムーズに進行している現在の状況を維持する ・上級生が下級生に仕事内容を指導する体制も作れており、1年生も積極的に活動に参加している。この状態を大切に、一層の生徒会活動の活発化を図る	・球技大会、学校祭等において生徒主体で企画・運営ができた ・部長マネージャー会議において執行部主体で運営ができ、部活動を生徒が主体的に考えて行う態勢ができてきた		B	・引き続き学校行事や部活動が生徒主体で行われていくよう指導していく
	望ましい人間関係の構築	○自己の個性の理解と他者の個性の尊重 ○自尊感情の育成	○コミュニケーションが苦手な生徒や不適応の生徒の増加傾向にある ○SNS等でトラブルがおこることがある ○ボランティア活動への参加者は増加している	○自分を含め一人ひとりが大切な存在と認識できる ○良好な人間関係およびコミュニケーションができる	・学期毎の職員会議において生徒の状況報告を行い、職員間の情報共有をさらに深める ・情報リテラシーに関する講演会は、今後も入学予定者とその保護者に対しても継続する ・教科「情報」だけでなく、iPadを用いた授業においても情報リテラシーについて積極的に取り上げる	・「支援部周知事項」フォルダを開設し、職員間の生徒情報の共有化を図り、より細やかな生徒対応の素地ができた ・新入生とその保護者に対する情報リテラシーの講演会は、一定の効果があった ・iPadを利用した授業も行われるようになり、教科「情報」だけでなく情報リテラシーを扱う場面が増えた	B	・「SSW」および「若者サポートステーション」の定期的な来校が実現し、今後さらに連携を深める ・スマートフォンの利用方法等、人権意識の啓発も含めて今後も指導する	
		○社会貢献活動への積極的な参加 ○主権者意識の育成		○各種ボランティアへの参加者が一層増加する ○学校として地域貢献活動へ取り組む	・総合的な学習の時間や校内のHR活動と運動させながら、より一層のボランティア活動の活性化に取り組む ・地域での清掃活動を通して、生徒にも地域に関心を持たせる一助とする	・ボランティアに参加する1年生は増えた ・一方、3年生の参加者が減少した ・1年生の地域清掃は天候のため中止となったが、2年生は今後実施する予定である	C	・1・2年生を中心にボランティアへの参加の意義ややりがいを訴えていくとともに、学年団との連携を密にしていこう ・地域貢献活動については、今後とも継続する	
④保護者・ 地域と連携 した活力あ る学校づく り	学校教育活 動の積極的 な公開	○PTA活動の一層の充実 ○学校と保護者の連帯の強化	○PTA大学訪問研修や交通安全街頭指導にも保護者の積極的な参加がある ○ホームページを利用しての情報発信方法を改善した	○PTA活動への参加者が増加する ○よりタイムリーにホームページの更新を行う	・緊急時は、ホームページでもタイムリーな情報発信を行う ・教育活動の発信についても、担当者が校務委員会で確認する ・公開授業や「翠燦く」等の公開できる行事に関しては、地域の小中学校等にも案内を行う	・学校が行っている様々な教育活動について、ホームページでタイムリーに発信できた ・交通安全指導や2000人壁画作成など保護者が積極的に参加している	B	・現在、ホームページに発信されていない活動については確認しつつ、より充実したホームページとなるように発信を続けていく ・部活動においては一部の部活動のみの発信であり、他の部活動も積極的に発信するようにする	
		○公開授業や人権公開LHRの充実		○保護者、関係機関、地域からの参加者の増加する	・保護者への案内文書やPTA広報紙での発信に加え、ホームページの更なる活用や地域への発信も行う ・例年発行のPTA人権広報誌により、生徒・保護者への内容の周知とともに人権意識の啓発を図る	・1学期の公開授業への保護者の参加が少なかった ・PTA人権広報誌「みはるかせ」を1学期に発行した ・生徒の人権講演会や公開LHRの行事を中心に保護者とLHRの内容の共有化を図った		B	・人権教育LHR、「みらいチャレンジ活動」発表会等への保護者の参観が増えるように広報に努める ・PTA人権教育部主催の講演会を中心に2学期は「みはるかせ」を2回発行する
	地域や関係 機関との連 携の強化	○中高連携事業の一層の充実 ○文化部総合芸術祭「翠燦く」の一層の充実	○芸術科を中心とした中高連携事業は年々参加者が増加し、定着してきた ○高大連携により「みらいチャレンジ活動」の充実を図ることができた	○芸術科だけでなく、他教科も含めて連携を模索する	・中高連携事業の内容について中学校と連携し検討する ・「翠燦く」は、今までの多面的な感想を取りまとめ今後を生かすよう検討する	・中高連携事業は中学生の参加も多く、充実した時間を過ごしている。今後、パフォーマンスをより良いものとするよう最後の調整を行う ・「翠燦く」は今後具体的な内容へと入っていく予定である	B	・書道の常勤の教員がいなかったため、いずれの活動にも支障をきたしている現実がある。来年度に向けてその解決策を模索する	
		○高大連携の強化と生徒の変容		○各大学訪問の参加者の予定人数が確保できる ○アドバイザーの指導により「みらいチャレンジ活動」が一層の充実する	・大学訪問については、本校の卒業生との懇談等を取り入れ内容を充実させる ・「みらいチャレンジ活動」は、今年度もアドバイザー（大学教授）を迎え専門家から見た活動への評価を参考にする	・大学訪問については、島根県立大学・鳥取大学・島根大学への訪問を実施した。参加生徒の評価は高く、卒業生との懇談が好評であった ・「みらいチャレンジ活動」では、アドバイザーからの助言から来年度活動への改善ポイントを絞り込むことができた	A	・大学訪問については、生徒へのアンケートをもとに予算面からも改善に繋げたい ・「みらいチャレンジ活動」では、アドバイザーからの助言を来年度の計画に反映させて実施する	

評価基準 A：十分達成（100%） B：概ね達成（80%程度） C：変化の兆し（60%程度） D：まだ不十分（40%程度） E：目標・方策の見直し（30%以下）